

剣道における昇段審査の研究—八段審査の事例分析を中心に—

林 邦夫

中京大学

キーワード: 初太刀, 発現打突, 有効打突, 時間配分, 移動軌跡

【要 旨】

剣道愛好者は、仕事の傍ら剣道の指導と自己の稽古を行うのが一般的で、土曜・日曜日は審判や講習会・稽古会などで自らの稽古の内容を振り返り、研究する時間が少ないのが現状である。自らの技能向上について、少ない時間を効率的に工夫研究する一つの方法としてビデオの活用が効果的である。本研究では、剣道の世界において最難関とされる、段位審査、剣道八段審査の第2次実技審査に着目して、その立合い内容を、VTR映像を用いて、初太刀・発現打突・有効打突・時間配分・移動軌跡の項目に分けて分析・考察を行った。その場合、自分の見た目と他人の見た目に違いが生じる場合もあり、間違った見方で稽古しても技能の向上は非常に困難であると考えられる。よってビデオを活用し、自分の演武の分析をするためにどのような視点でもってその内容を検証し技能向上を図るか？ということ課題とした。結果、実技試験の合否要素を決定付け得る要素が、それぞれの項目において傾向が見られた。

スポーツパフォーマンス研究, 1, 131-139, 2009年, 受付日:2008年11月28日, 受理日:2009年2月24日

責任著者:林邦夫 〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立101 中京大学 khayashi@sass.chukyo-u.ac.jp

Promotion test in kendo: Case analysis of the skill test for the 8th dan

Kunio Hayashi

Chukyo University

Key Words: first strike, initiation of *datotsu*, effective *datotsu*, time distribution,
location of movements

[Abstract]

Kendo enthusiasts often teach and practice kendo while holding some other job. On Saturdays and Sundays, when they are not working, they spend most of their

time refereeing matches and attending seminars and training meetings, and have little time left in which to review and improve their own skills. An effective way to improve kendo skills for those with little time is to use videos. The present study focused on the second-stage skill test for the 8th *dan*, which is said to be the most difficult examination in kendo, analyzing and discussing the results of that test by dividing it into 5 items, i.e., the first strike, initiation of *datotsu* (striking and thrusting), effective *datotsu*, time distribution, and the location of movements. There are likely to be discrepancies in the results because a participant's point of view is different from others' points of view. Skills cannot be expected to improve if the view is from the wrong perspective. Therefore, in the present study, individuals' own kendo performance was analyzed by utilizing video, in order to improve their skill. Certain tendencies in the elements were found that determined the test results.

I. はじめに

剣道は現代社会において、日常生活とは切り放せない密接な文化の一つとして世界的な規模で実施されてきている。剣道修行の目的は、①競技として(競技剣道)、②段位取得として(文化剣道)、③健康のために(健康剣道)、④己を磨き高めるための(教養剣道) 剣道に分けられよう。それぞれの目的は独立したものでなく、お互いに密接な関連を有している。競技剣道を修行する者にとっても健康でなければその目的は達成できないであろうし、健康のための剣道を行っている者にとっても競技的な要素があった方が長続きするし、楽しみを深めることもできる。さらに、段位取得や己を磨くための剣道は、将来にわたり質を高める文化的側面であろう。

剣道の昇段審査は、初段から八段まで行われている。審査は、審査員が審査基準に基づいて合否を判定する。受審者は定められた時間内に演武(立合)し自己の最高のパフォーマンスを発揮しようと努める。審査で最も難関とされる八段審査(合格率 約 1%) は、一次審査と二次審査の二回実施され、一次審査合格者は二次審査に進む。二次審査合格者は日本剣道形が審査され、全てクリアすると実技合格者となる。さらに合格者に対して後日、八段研修会が課せられる。

そこで今回は、最も難しいとされる八段審査の二次審査に注目し、演武(立合)をビデオテープに撮影し、初太刀と技の発現打突・有効打突および時間配分さらに身体移動軌跡の VTR 分析を試みた。

II. 分析方法

対象者は、二次審査に望んだ男子(48 歳)の HA と HO の 2 名とした。HA の対戦相手は一人目が AR、二人目・OO である。HO の対戦者は一人目 AA で二人目が MI であった。

審査の撮影は、8mm カメラを使用し、立会人の「始め」から演武が終了するまでとした。

VTR の解析時間は、立会人の「始め」から「止め」の宣告まで 2 分とした。

演武の解析は、SONY のビデオデッキでテープを再生し時間計測と技の発現および有効打突を分析した。技の発現と有効打突は、三人の高段者が見極めた。

受審者の移動軌跡においては、映像をパーソナルコンピュータ上に取り込み、面部の頭上に目印を付け、コマ送り再生によって軌跡をつくった。

III. 結果と考察

1. HA 剣士の VTR 分析

(1) 一人目の立合

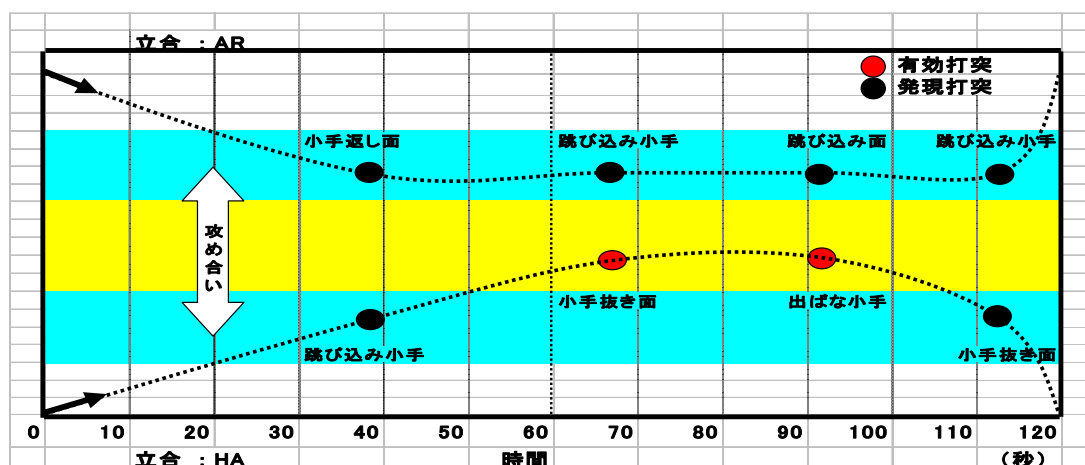


図1.HA の一人目の立合

表 1 . 時間・発現打突・有効打突

演武者 HA	時間 (秒)	発現打突	有効打突	演武者 AR	時間 (秒)	発現打突	有効打突
初太刀	39	跳び込み小手		初太刀	39	小手返し小手	
二の太刀	68	小手抜き面	◎	二の太刀	68	跳び込み小手	
三の太刀	91	出頭小手	◎	三の太刀	91	跳び込み面	
四の太刀	113	小手抜き面		四の太刀	113	跳び込み小手	
攻め合い	120	終了		攻め合い	120	終了	

図 1 は、HA 剣士と AR 剣士の立合を VTR から分析した模式図ある。横軸に時間、縦軸に発現打突と有効打突で黒丸が発現打突、赤丸が有効打突である。演武者の技の発現と時間および有効打突は、次のようであった。

立会人の「始め」の宣告から、両剣士とも蹲踞姿勢から立ち上がり遠い間合いで「ヤー」と発声し、気攻め・剣攻めそして体攻めの攻め合いで間合いを詰め、充実した攻め合いが 39 秒続き(表 1)、HA が跳び込み小手打の初太刀を発現したのに対し、AR が小手返し面に応じるが有効打突にならず。その後、激しい攻め合いが続き、68 秒後に HA が僅かに前に攻め入るところ AR が跳び込み小手に反撃するのを小手抜き面の有効打が決まる。さらに攻め合いが 91 秒で HA が前述と同様に前に攻め入るところ AR が跳び込み面に出る鼻を捉え出頭小手を決める。さらに攻め合いが続き 113 秒後 AR が小手に打って出るところを HA が小手抜き面で応じていた。その後 7 秒攻め合いが続き立会人の「止め」で演武は終了した。

このことから、HA は激しい攻め合いの中から初太刀を 39 秒で打突し発現打突は 4 本(跳び込み小手・小手抜き面・出頭小手・小手抜き面)で有効打突は(小手抜き面・出頭小手) 2 本取得していた。発現打突に対する有効打突の割合は、5 0%であった。一方、AR は発現打突 4 本で有効打突は見られなかった。

両者の演武は、HA が先に仕掛けて打突し、さらに僅か前に出て「先」を取り相手の発現打突を全て対応していた。つまり、攻め合いの中で有利な状態を創出し主導権を取っていたものと思われる。また、攻め合いと発現打突の時間間隔をみると、初太刀 39 秒後、次への技が 29 秒後、23 秒後、22 秒後、7 秒後に終了していたことから、攻め合いと技の発現の時間的配分に無理・無駄がなく、発現打突と有効打突の割合が 50%であることから、2 分間の時間が短く感じられよう。

両者の演武は、攻め合いから氣勢が充実し全身全霊の捨て身の打突が見られ残心が備わり縁が切れることなく気が集中し持続していた事から両者合格したものと考えられる。

(2) 二人目の立合

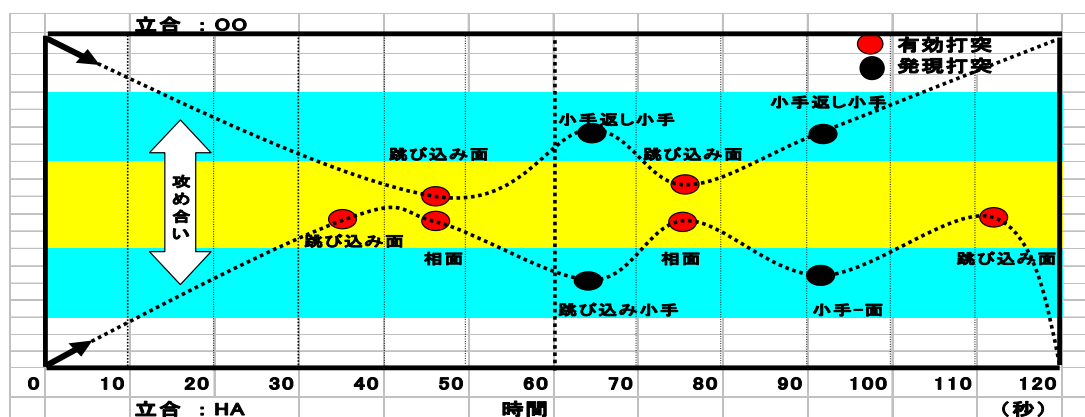


図2 二人目の立合

表 2 . 時間・発現打突・有効打突

演武者 HA	時間 (秒)	発現打突	有効打突	演武者 OO	時間 (秒)	発現打突	有効打突
初太刀	35	跳び込み面	◎	初太刀			
二の太刀	46	相面	◎	二の太刀	46	跳び込み面	◎
三の太刀	64	跳び込み小手		三の太刀	64	小手返し小手	
四の太刀	75	相面	◎	四の太刀	75	跳び込み面	◎
五の太刀	93	小手一面		五の太刀	93	小手返し小手	
六の太刀	112	跳び込み面	◎	六の太刀	112		
攻め合い	120	終了		攻め合い	120	終了	

表 2・図 2 は、HA 剣士と OO 剣士の同様な模式図とその内容である。立会人の「始め」の宣告後、遠い間合いで「ヤー」と発声し、剣先の攻め合いが続き、OO が僅かに前に出て攻めが攻めきれず、後に下がるところを HA はすかさず前に攻めは入って跳び込み面を打ち有効打突となる（初太刀 35 秒）。その後、攻め合いが続き OO が 46 秒で跳び込み面に出るところを捉えて相面

の見事な打突がみられた。64 秒後に HA の跳び込み小手に対して OO が小手返し小手を返した
 が有効とならず。その後攻め合い 75 秒続き前回と同様な見事な相面が決まる。93 秒で HA が表
 鎧を押さえ小手から面の二段打ちを OO 小手返し小手に対応する。その後、攻め合いが続き HA
 が 83 秒で剣先を下げて僅かに前に攻め入り手元の変化したところを跳び込み面に跳び有効打突
 がみられた。その後、8 秒攻め合いが続き演武が終了した。

以上のことから、HA は攻め合いから初太刀を 35 秒で打突し発現打突は 6 本（跳び込み面 2
 本・相面 2 本・跳び込み小手・小手-面）で有効打突は 4 本（跳び込み面 2 本・相面 2 本）で
 あった。発現打突に対する有効打突の割合は 66. 7%の高い値を示した。一方、OO は発現打突 4
 本、有効打突 2 本で発現打突に対する有効打突の割合は 50%であった。

HA は、攻め合いから OO の退いた一瞬を捉え、すかさず跳び込み面を打ち、初太刀を制した
 事から演武を有利な状態に進めたと思われる。立会人の「始め」から技の発現打突の時間的間隔
 をみると、初太刀が 35 秒で次の技が 11 秒、18 秒、11 秒、18 秒、19 秒、そして 8 秒後終了し
 た。この間の有効打突は、35 秒、11 秒後、29 秒後、37 秒後であった。また、前半で 2 本と後半
 で 2 本の有効打突がみられたことから、一人目の立合と同様に演武に無理・無駄がなく感じられた。
 次に間合いにおける攻め合いでは、常に「先」（主導権）を取り相手の仕掛けてくる技を迎える形
 で相面に対応していた。さらに相手が打ってこなければ中心を攻めていて中心を外し隙の生じたと
 ころを捨て身で打突していた。従って、攻め合いで氣勢が充実し「気」の集中と持続が維持され演
 武が途絶えることなく 2 分間の時間が短く感じられた。つまり、両者の充実した「攻め」と「捨て身の
 打突」そして「残心」が備わることにより、立合が命懸けに描写されたように感じられ両剣士とも合格
 したものと推察されよう。

2. HO 剣士の VTR 分析

(1) 一人目の立合

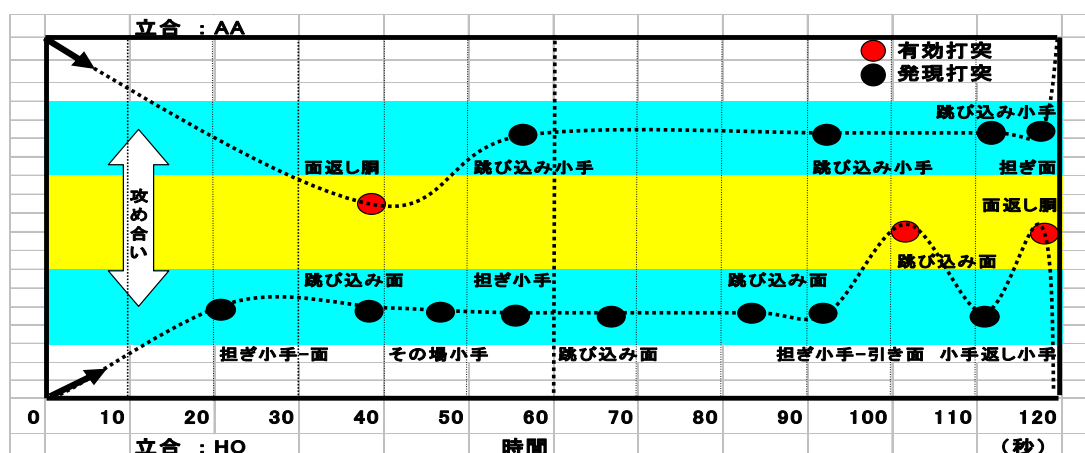


図 3. HO 一人目の立合

表 3 . 時間・発現打突・有効打突

演武者 HO	時間 (秒)	発現打突	有効打突	演武者 AA	時間 (秒)	発現打突	有効打突
初太刀	22	小手-面					
二の太刀	39	跳び込み面			39	面返し胴	◎
三の太刀	48	その場小手					
四の太刀	55	担ぎ小手			57	跳び込み小手	
五の太刀	68	跳び込み面					
六の太刀	74	跳び込み面					
七の太刀	86	担ぎ小手退き					
八の太刀	92	跳び込み面	◎				
九の太刀	102	小手返し面			102	跳び込み小手	
十の太刀	111	面返し胴	◎		111	担ぎ面	
攻め合い	120	終了			120	終了	

図 3・表 3 は、HO 剣士の模式図とその内容である。立会人の「始め」の宣告で攻め合いが続き、HO が 22 秒で小手から面の初太刀を発現したが有効打突にならず、続いて 39 秒後跳び込み面を打つが面返し胴で有効打突を取得される。攻め合いが続き 48 秒後 AA が前に攻めようとするところをその場で小手を打つ、55 秒後担ぎ小手に打って出るが AA も小手に打ち込む、攻め合いが続き跳び込み面に打って出るが下がってかわされる。続いて AA が前に攻めは入ってくるのを溜めて跳び込み面(74秒)を打つが有効打にならず。その後 86 秒で担ぎ小手から退き面を打つ、92 秒後 AA が前に攻めは入るところを捉えて跳び込み面が決まる。102 秒後、相手が跳び込み小手を打ってきたのを小手返し面で打ち返したが有効打にならず。111 秒後、担ぎ面に対して面返し胴で有効打突が決まり終了した。

これらのことから、HO の初太刀は 22 秒で発現打突は 10 本、そのうち 2 本が有効打突であった。発現打突の中で仕掛け技が 8 本(小手- 面・跳び込み面 4 本・その場小手・担ぎ小手 2 本)、応じ技が 2 本(小手返し面・面返し胴)であった。有効打突は、跳び込み面と面返し胴の 2 本。発現打突に対する有効打突の割合は 20%であった

合格者 HA と比較すると、初太刀の技を発現するまでの時間が早い事と 2 分間の短い時間の中で技の発現打突数が多い。また、発現打突に対する有効打突の割合が少ない。さらに前半は仕掛け技が中心で立合後半の終了間際に応じ技を発現していた。

つまり、立会人の「始め」の宣告から、攻め合いにおいて充実した氣勢から「剣攻め」と「体攻め」で攻め合い充分条件を満たしてから初太刀を発現することが必要であろう。また、攻めが相手に通じていないため無駄打ちが多くなっている事から、攻め合いの中で相手の剣風と技量を読み取り戦い方を工夫する事が肝要である。つまり、攻め合いの中で「攻め」と相手を「迎える」攻防動作が必要条件であろう。

(2) 二人目の立合

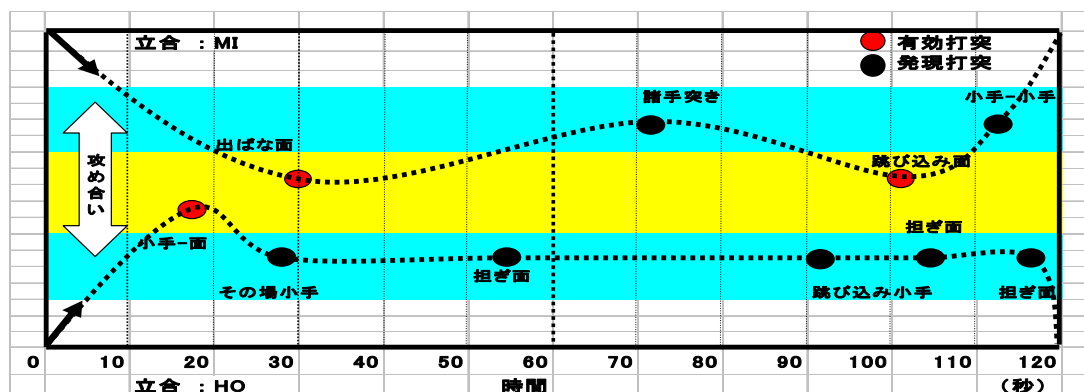


図 4. HO 二人目の立合

表 4 . 時間・発現打突・有効打突

演武者 HO	時間 (秒)	発現打突	有効打突	演武者 MI	時間 (秒)	発現打突	有効打突
初太刀	17	担ぎ小手一面	◎				
二の太刀	29	その場小手			30	出頭面	◎
三の太刀	55	担ぎ面					
四の太刀	92	担ぎ小手			71	諸手突き	
五の太刀	108	担ぎ面			101	跳び込み面	◎
六の太刀	118	担ぎ面			117	小手-小手	
攻め合い	120	終了			120	終了	

図 4・表 4 は、二人目の模式図とその内容である。初太刀は HO が 17 秒で担ぎ小手から面を打撃し有効打突を発現していた。その後 29 秒で MI の攻めに対してその場で小手を打ち前に出ようとするところを出頭の面を打たれ有効打突になっていた。HO が 55 秒で担ぎ面を打ち、その後、攻め合いが続き 71 秒で相手が諸手突きを前さばきで対応していた。101 秒後、MI が前に攻め入り跳び込み面を発現し有効打突になっていた。その後攻め合いから 117 秒で MI の小手- 小手を交わし見事な担ぎ面を打ったが倒れ 2 秒後終了となった。これらのことから、初太刀は HO が 17 秒で発現打突は 6 本、有効打突は 1 本であった。発現打突は全て仕掛け技で応じ技は見られなかった。発現打突は、小手一面の二段技・担ぎ面 3 本・その場小手 1 本・担ぎ小手 1 本であった。有効打突は小手から面の 1 本取得し 2 本取られていた(出頭の面・跳び込み面)。発現打突に対する有効打突の割合は 16.6%であった。以上のことから、初太刀が早いのは MI が「始め」と同時に前に攻め入ってくるために早く打突をしたものと思われる。従って、剣さばきと体さばきで前捌きをして攻め返すことが必要であろう。また、相手の打突に対して応じ技が見られない事ら応じ技で対応

する技術が必要である。さらに間合いが近いために打ち急ぎ担ぎ技を多用している事から、間合いの近いときは二段技や巻き技・払い技を使うと良いと思われる。つまり、一本打って攻め次の技で決める事が必要であろう。あるいは、相手の竹刀を巻くか払って崩して打突すると効果的であると考えられる。

本事例から、八段合格の要素として、初太刀は充実した氣勢と剣攻め・体攻めで攻め合い 35 秒から 39 秒程度の攻め合いが望ましい。攻め合いの中でどの様な相手であるか早く察知することが必要である。技の発現は 2 分間の中で 4 本から 6 本の発現打突で有効打突が 50%から 66%の無駄打が少ない事が望まれよう。発現打突は思い切った捨て身の打突つまり本気で打ち込むことが必要であろう。しかし、相手により様々に変化する「場」の中で普遍的な対応する技術がより必要であろう。

3. 審査時の移動軌跡

図 5・6 は、HA の一人目と二人目の移動軌跡である。図 7・8 は HO である。HA は、一人目と二人目の立合とも中心点(●印)を軸に正面の審査員席に対して常に平行におこない審査員が見やすい位置取りで演武していた。一方、HO は中心点から移動が定まらず審査員の見にくい位置取りであった。つまり演武を行う場合は審査員がよく見える位置で演武することが必要である。例えば、構え・攻め・崩しそして息づかいや有効打突・残心など良く見える位置で行うことが必要であろう。

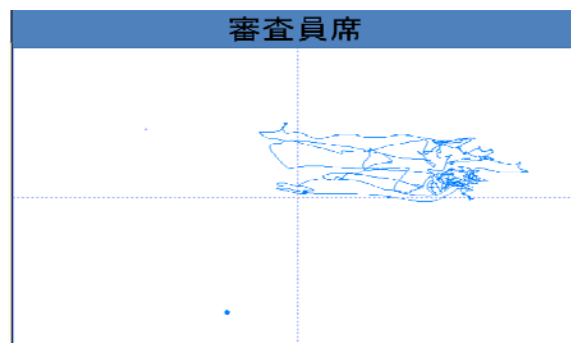


図5 HA の一人目の移動軌跡

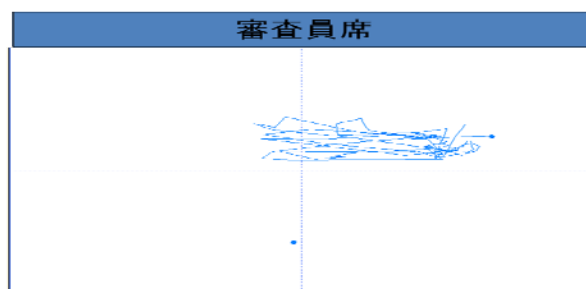


図6 HA の二人目の移動軌跡

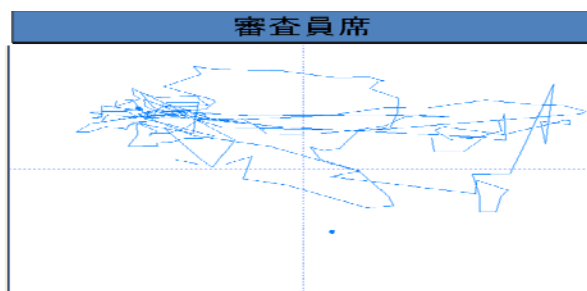


図7 HO の一人目の移動軌跡

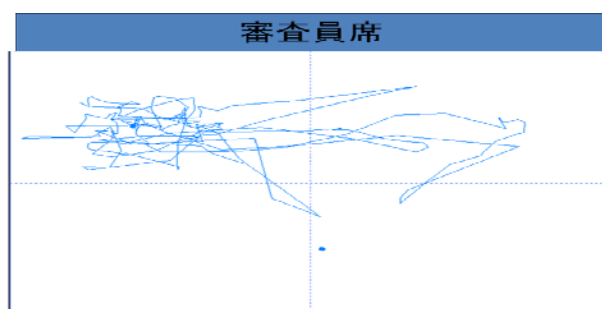


図8 HO の二人目の移動軌跡

IV . まとめ

本研究は、最も難しいとされている剣道 8 段審査の VTR 解析を合格者と不合格者を比較検討したところ次のことが明らかになった。

1. 攻め合いからの初太刀は、合格者 35 秒ら 39 秒で不合格者 17 秒と 22 秒であった。
2. 発現打突は、合格者一人目 4 本・二人目 6 本で少なく、不合格者 10 本と 6 本であった。仕掛け技は合格者 2 本(一人目)と 4 本(二人目)、打突に対する応じ技は 2 本と 2 本で、不合格者の仕掛け技は、一人目 8 本で二人目 6 本、応じ技一人目 2 本で二人目は発現してなかった。
3. 有効打突は、合格者一人目 2 本取得し、二人目 4 本であった。一方、不合格者は 2 本(一人目)と 1 本で少なかった。
4. 発現打突に対する有効打突の割合は、合格者 50%(一人目)と 66%(二人目)で確率が高く不合格者は 20%と 16%であった。
5. 立合の「場」における移動軌跡は、合格者は常に中心で演武をおこない審査員の良く見える位置で立合っていた。一方、不合格者は中心から離れ審査員の見にくい位置で演武する傾向がみられた。

V. 文献

- ・ 林邦夫, 堀山健治(2007)剣道における昇段審査の研究—八段審査の事例分析を中心に—. 武道学研究第 40 巻別冊日本武道学会第 40 回大会研究抄録. p56.
- ・ 林邦夫(2008)合否の差はここにあった!. 剣道日本通巻 386 号. スキージャーナル. pp36-40.